

[シンポジウム]

ジャッケンドフの概念意味論と ラネカーの認知文法の基盤に関して

小 泉 保

(1) ジャッケンドフの概念意味論 (*Semantics and Cognition* 1983)

1) 現実世界と投射世界との関係

(a) The real world: the source of environment input (p.28)

(b) The projected world: the world as experienced

われわれは直接現実世界を知覚することはできない。どうしても次のような存在論的カテゴリーの枠組みを通して外界を認知せざるをえない。これが投射世界である。7種の存在論的カテゴリーは、次の疑問詞に対する応答という形で取り出すことができるとしている。

2) 存在論的カテゴリー (Seven ontological categories) (p.53)

a) What did you buy? A fish. [THING]

b) Where is my coat? In the bathtub. [PLACE]

c) Where did you go? Into the bathtub. [DIRECTION]

d) What did you do? Go to the store. [ACTION]

e) What happened next? Bill fell out the window. [EVENT]

f) How did you cook the eggs? Slowly. [MANNER]

g) How long was the fish? Twelve feet. [AMOUNT] (以上7種)

さらに、通路 (PATH) が追加されている。

3) 通路 The mouse ran into the room. (通路は (場所関数+もの) の関数である)

上の文の into は [Path TO ([Place IN ([Thing ROOM]))]) と意味分析される。(p.175)

4) 使役関数 (The cause function)

[Event CAUSE ([Thing x], [Event y])] 使役関数はものと出来事を項とし、「ものの動作

主 X が出来事 Y を引き起こす」と解釈される。

Beth threw the ball out the window. (使役関数の適用例)

[Event CAUSE ([thing BETH], [Event GO ([Thing BALL], [Path OUT WINDOW]])])]

「Beth はボールが窓から出るようにさせた=放り出した」

5) 空間的意味分野 (The spatial semantic field) 以上のような空間の意味分析が時間分野、認定分野、状況分野にも適用できると考えている。

6) 時間分野 (The temporal field) (空間の意味分析を時間の分野へ適用した場合)

We moved the meeting from Tuesday to Thursday.

[Event CAUSE ([Thing WE], [Event GO Temp ([Event MEETING], [Path FROM Temp ([Time TUESDAY], TO Temp ([Time THURSDAY])])])]

「会合を火曜日から木曜日へ移動させた」

7) 所有分野 (The possessive field) (さらに、所有分野に適用した場合)

a) Beth has the doll. (ものが所有者の所にある。

[State BE Poss ([DOLL], [Place AT Poss ([BETH]) (BE は存在関数)

b) Beth received the doll. (ものが所有者の所へ移動する)「受け取る」

[Event GO Poss ([DOLL], [Path TO Poss ([BETH])])]

c) Beth lost the doll. (ものが所有者の所から離脱する)「失う」

[Event GO Poss ([DOLL], [Path FROM Poss ([BETH])])]

d) Amy gave the doll to Beth. (ものがある所有者から他の所有者へ移動する)

「与える」

[CAUSE ([AMY], [GO Poss ([DOLL], [Path FROM Poss ([AMY], TO Poss [BETH])])])]

8) 認定分野 (The identificational field) (形相の状態と変化)

Elise became into a mother. (個別のトークンがタイプへと認定移動する)

[Event GO Ident ([Token ELISE], [Path TO Ident ([Type MOTHER])])]

9) 状況分野 (The circumstantial field) (出来事の状態と変化)

a) Ludwig started composing quartets. (ある人物がある出来事に入る)

[GO Circ ([LUDWIG] i, [Path TO Circ ([i COMPOSE QUARTETS])])]

= COMPOSE (LUDWIG, QUARTETS)

- b) Ludwig stopped composing quartets. (ある人物がある出来事から離脱する)
[GO Circ ([LUDWIG] i, [Path FROM Circ ([i COMPOSE QUARTETS])])] 「終える」
- c) Ludwig is composing quartets. (ある人物がある出来事の状態にある)
[State BE Circ ([LUDWIG] i, [Place AT Circ [i COMPOSE QUARTETS]])]]
「続ける」 「Ludwig は四重奏を作曲している」
- d) Sue prevented Jim from singing. (ある人物をある出来事にないようにさせる = ある出来事から引き離しておく) 「Sue は Jim を歌わせないようにした」
[CAUSE ([SUE] , [STAY Circ ([JIM] i, [NOT AT Circ ([i SING])])])]]
[i] は前述の人物 Jim を指す。NOT AT = FROM と語彙化される。

- 10) 伝達の意味構造 (概念意味論に次のような伝達の意味構造を加えれば、Speech act の働きをもたせることができるのではないか)

I give my message to you.

[CAUSE ([I] , [GO Poss [MESSAGE] , [Path FROM Poss ([I] TO Poss [YOU])])]]

My message: my information, my request, my promise, my advice

すなわち、話し手が聞き手に自分のメッセージを伝えるのであるが、その内容を情報、依頼、約束などに変えれば発話内行為の役割を果たすことができるのではないか。

なお、ジャッケンドフ (2002:356) は、空間の位置と移動は、所有および特性の帰属 (認定分野) との間に平行性のあることを重ねて認めている。

(2) ラネカーの認知文法 (*Foundation of Cognitive Grammar I.1987,II.1991*)

認知言語学における直示について考察してみよう。ラネカーは直示を扱うに当たり Ground 「基盤」という用語を用いている。

I will use the term ground to indicate the speech event, its participants, and its setting. A deictic expression can then be defined as one that includes some reference to a ground element within its scope of predication. (I.126)

そして、I や you は言語行為の関与者を表すものであり、here や now は発話の場所と時間を示す直示であるとしている。そこで、「基盤」の内容をさらに明確に知る必要がある。

ラネカーが用いている基盤の原型と思われるものが、彼の論文 'The form and meaning of the English auxiliary' (1978) の中に提示されている。当時ラネカーは生成意味論の立場にあり、語用論における speech act の影響を受けている。

例えば、He may have been swimming.という文は次のように構造分析されている。

図1

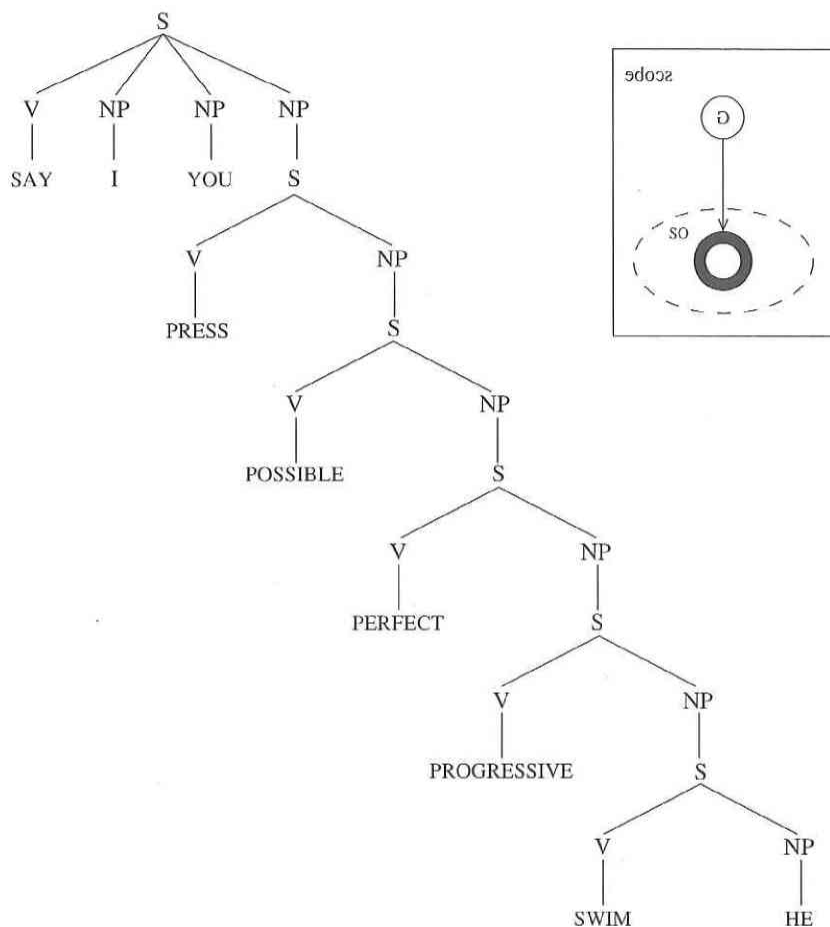


FIGURE 1. *He may have been swimming*
may, have, be = [+AUX] ; = [-AUX].

この構造表示から、ラネカーの言う Ground は最上位の S に含まれている SAY-I-YOU-の部分、すなわち J.R.Ross の a performative analysis における上層部に相当する。たしかに、この基盤における遂行動詞 SAY は発話の現在を、I は話し手を、YOU は聞き手を表している。また、here は話し手の位置を示し、now は発話時を指す。すると、K.Bhüler の述べている *I/here/now* という直示の原点 *origo* は基盤の中にあることになる。

ラネカーは、最上位の S における右端の伝達内容を表す NP-S を OS (ObjectiveScene)

「客観的場面」という形で切り離している (II,93-4)。認知文法の立場からすれば、認知する者と認知される対象とを峻別する必要がある。そこで、基盤と客観的場面との間に分割線を引くこととなった。

Ground (SAY-I-YOU) || Objective Scene (-S)

図1であれば、基盤は-Sを通して下部末端まで支配できるが、客観的場面 OS が認知空間において分離されると、基盤は grounding 「基盤化」という機能を立てて、OS に働きかけるしかない。基盤化 G → OS によって、客観的場面は話し手と聞き手に結びつけられる。

だが、認知文法の中心はどこまでも話し手で、自己中心的である。そこで、客観的場面の中で、聞き手も話し手と同じ対象を認知する必要性が生じてくる。だから、両者は mental contact 「心的接触」により、同一対象に注意が向けられるように取り計らわれなければならない (II,191-3)。

とにかく、基盤の中に直示の基本的要素は含まれているが、やはり話し手と聞き手との関係を明確にし、直示体系の構造を整備する必要がある。

参考文献

- Jackendoff, R. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Jackendoff, R. 2002. *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
Langacker, R.W. 1978. "The Form and Meaning of the English Auxiliary." *Language* 54:4, 853-882.
Langacker R.W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1. Stanford.: Stanford University Press.
Langacker, R.W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.2. Stanford: Stanford University Press.